

---

# それでもアタシは恋をする

千颯

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

それでもアタシは恋をする

### 【Nコード】

N8876U

### 【作者名】

千颯

### 【あらすじ】

平次の事が好きだった。毎日毎日平次で心を一杯にして平次だけを追いかけた。何となく一人空回りしてる気がした時もあったけど、それを深く考えず、ただ盲目的に平次だけを見つめていた。アホなアタシはずっと傍にいれば、ずっと思い続けていれば、いつかこの想いが届くと信じていた。

## 第一章 初恋 (1) 変わっていく二人(前書き)

和葉の恋愛です。最終的には平和ではありません。ご注意ください

## 第一章 初恋 (1) 変わっていく二人

「和葉のことはそういう目で見れんねん。」平次のはっきりした声が耳に届いた。

「・・・そうなのか？」困惑したような工藤の声。

「ああ、お前、俺が鈍いと思ってたんやろうけど、いくら俺でも自分の気持ちはわかるわ。和葉の気持ち知ってたから、優しくしてきただけど、俺があいつを好きになることはない。それを突き放さないのは、ただ、俺を好きな和葉を傍に置いておきたいだけや。何があっても、俺の気持ちはあいつには向かん。」

「・・・残酷だな。」

「何とでも言えや。それが俺の本心や。」

・・・カタン

「今何か音がしなかったか？」

「いんや。俺には聞こえなかったぞ。」

「・・・そうか。」

(1) 変わっていく二人

「平次の事が好きだった。毎日毎日平次で心を一杯にして平次だけを追いかけた。何となく一人空回りしてる気がした時もあったけど、それを深く考えず、ただ盲目的に平次だけを見つめていた。アホなアタシはずっと傍にいれば、ずっと思い続けていれば、いつかこの想いが届くと信じていた」

あの日、工藤帰還祝いの時に盗み聞いた平次の本心。

それを聞いた和葉は、絶望に囚われた。そういえば・・・と思い当たる事が走馬灯のように頭を駆けめぐった。自分でもわかってた。それを今まで都合よく解釈していただけ。

・・・平次はアタシを見ていない。見る事もない。  
その事実和葉の自信やプライドすべてを打ち砕いた・・・。  
その夜和葉は一睡もできなかった。

次の日、蘭達と4人でトロピカルランドへ行った。

普通にしようと思っても、平次の顔色を伺うばかりで、いつものような軽口が叩けない。

そんなおどおどした和葉に平次はイラつき、ますます和葉は萎縮するという負のスパイラルに陥ってしまった。

「なんやねん、お前。」

「ごめん。あ、や、ごめんなさい。」

何度この会話を繰り返したのか。

蘭と工藤は顔を見合わせた。

大阪へ帰る日、和葉は工藤に呼ばれた。

「和葉ちゃん、ちょっといい？」

「うん。」

二人での書斎に入った。

「・・・あの・・・和葉ちゃんに、言っておきたいことがあるんだ。」

「

「・・・うん。」

「服部の気持ちなんだけど。」

「・・・うん。」

「ひょっとしてこの間和葉ちゃん、ドアの外で聞いてた？」

「・・・うん。」

「・・・そっか。あんまりにも態度が違ったから・・・。辛いだろうけど、聞いてくれる？」

「・・・うん。」

「あれ・・・あれは、あいつの本心だ。あいつは嘘をついていない。探偵としての俺が言うから間違いない。」

工藤はつらそうな顔で言葉を詰まらせながら言った。

「・・・そやろうね。」

「和葉ちゃん・・・。辛いだろーけど、服部から離れたほうがよくないか？今の和葉ちゃんはおかしいよ？」

「・・・いやや。」

「和葉ちゃん・・・。」

「自分でもおかしいのはわかってんねん。」

「・・・うん。」

「平次の本心聞いた時な、どうしていいかわからんかってん。ただ、自分のすべてが拒否されたような気がしたんや。」

「・・・うん。」

「きつとな、アタシの中身は平次だけでできてたんや。平次から拒絶されたら、アタシどうやって生きていいかわからんねん。」

「・・・。」

「・・・やから、平次から好かれる事がないってわかってもうたら、平次とどう接していいかもわからんねん。平次が怖いねん。平次から嫌われたらどうしようって、今までのように振舞う事ができんねん。でも、離れとうはない！」和葉は泣き出した。

「・・・そうか。」

しばらく工藤は和葉を痛ましそうな眼で見ていたが、決心したかのように話し出した。

「和葉ちゃん。」

「何？」

「きついことを言うようだけど、服部の顔を伺いながらずっと生きていくの？それに・・・それを続けたら、和葉ちゃん的人格はもちろん、服部にも悪影響を及ぼすよ。」

「・・・平次に？何で？」

「・・・はつきりとはいえないけど、多分。」

「・・・工藤君。平次はかわらんよ。平次は平次やもん。」

「人間絶対はないんだ・・・。」工藤は辛そうに言う

「時間をかけてよく考えて。和葉ちゃん、服部だけが和葉ちゃんの人生じゃないんだよ・・・さ、時間だ。もう行こうか。」

## 第一章 初恋 (1) 変わっていく二人(後書き)

いきなりブルーな始まりです。すみません。



## (2) 負のスパイラル

工藤の助言は的確だった。

毎日びくびくと平次の顔色を伺う和葉。

最初は気遣っていたが、だんだんそれを疎ましく思うようになった平次。

理由を聞いても答えない。自分の意見を言わない。邪険に扱っても困ったような笑顔でついてくる。

何でも言う事を聞き、従う和葉に対し、だんだん平次はイラつきを露にするようになった。

「お前何でこんなことすんねん！ついてくんな！」  
怒り露に怒鳴っても、

「ごめん、ごめんな平次。」

和葉は泣きそうな顔で謝る。平次はそれを嫌そうに見ると、和葉を残して去っていく。

帰り待っている和葉が鬱陶しくて、ほっぴらかしにして、裏門から帰ったことも何回もあった。

そうするとますます和葉は平次の顔色を伺って謝り、一層頑張ろうとするのだが、それはかえって平次の怒りを買うだけだった。

・・・今までだったら対等な立場で言えたことも、今は言えない・・・  
・最近の名前すら呼んでももらえない・・・。

明るく快活だった和葉は、おどおどした風貌になり、何をするにも

自信がなくなった。

そういう雰囲気はすぐばれる。そんな二人の關係に気付いたクラスの一部の人間が、今まで平次の傍にいた和葉に対する鬱憤をはらすかのように、からかい、いじり始めた。

容赦ないからかいが和葉を傷つける。しかし、平次はそれを見てもぬ振りをし、すぎるような目でみる和葉を鬱陶しそうに無視した。するとそれは段々エスカレートし、ますます和葉は自信をなくしていった。

「アンタらしい加減にせい！」

「和葉！何で言い返さんの！」

「服部も何で何も言わんの！」

「あんたらおかしいで？和葉、昔の和葉に帰ってよ！」

親友達は和葉をかばい口々にそう言ったが、和葉は悲しそうに笑って首を振るだけだった。

そんな日が続いたある日、放課後雨が降り、和葉は平次を待っていた。

やっと来た平次は面倒くさそうに「傘持ってるか？」と言った。頷くと「ん」と手を出し、傘をもぎ取られた。意味がわからず平次を見ると、横には和葉をからかうクラスの女の子。

「おおきに、遠山さん。」

にっこり微笑むと、平次と仲良く相合傘で帰っていった。

和葉は呆然と立ちすくんだ。

土砂降りの中、校舎に一人。

和葉は泣かなかった。

（アタシが悪かったんや。二本傘を持ってこなかったから。）

ただとぼとぼと歩き続けた。このまま雨と一緒に地面に消えるような感覚が和葉の体を支配し始めた。

そんな時「和葉っ！」

叫び声ににた呼びかけが和葉を現実に戻した。

「美沙・・・」

美沙と呼ばれた少女は和葉を傘に入れると、腕をつかんで詰め寄った  
「アンタ何やっとな！傘は？持ってたやろ！？」

「・・・傘・・・平次に」

下を向いた和葉の髪からぽたぽた雫が落ちる

「はぁぁ？その服部はどうしたん！」

「・・・塩崎さんと帰った。」

「・・・何やて！？」

和葉は下を向いたままだった。

美沙はため息をつく、「このままでは、バスも乗れんやろ？うち  
近くやから、家においで。」そう誘った。

和葉は小さく頷くと、美沙と一緒に帰って行った。

美沙の家で風呂をかり、服をかりて美沙の部屋に行くと、友人達が  
集まっていた。

「・・・みんな、どうしたん？」

「和葉・・・。」美沙が真剣な顔をして言った。

「何があったん？アンタこの一ヶ月おかしいで？服部に何か弱みで  
も握られとん？」

みんな心配そうな目で見ている。

「弱みって・・・平次はそんな人ちゃうよ。アタシがいかんのや。  
アタシがちゃんとできへんから・・・だから平次が怒るんや。」

「和葉っ！」

強く言われびくつと和葉の体が揺れた。

「もうええ。もうええから。アンタのわけわからん反省はもうええ  
から。何があったん？話してみ？」

美沙の優しい声に、和葉の頬に涙が流れた。

「・・・アタシ・・・アタシな。」

初めて友達の前であの日のことを語った。

全部話し終わると、待っていたのはみんなの罵倒だった。

「アンタ何やってんの!？」

「あほちゃう!？」

「プライドはないん!？」

・・・和葉は目をぱちくりした

「・・・プライド？」

「そうやっ! アンタの今の状況は人間としての尊厳もないわっ! アンタを見らんっていう人間に、そこまで縋ってどうする!」

「そ、そんな言わんでも・・・。」

「服部も服部や。最近の服部は鼻持ちならん!」

「へ、平次は悪くない・・・アタシが・・・。」

「バカカたれ!」

「その思考がおかしいねん!」

「傘ぶんどくって、他の女と帰る男のどこが悪くないねん!」

「アンタ、もしアタシの彼氏がそないなことしたら、どうする?」

「・・・そりゃ怒るけど・・・平次やし。」

「だくくっ! ええ加減にせい! 服部は神様でも何でもないんや! もちろん完璧でない! アイツだって悪いところもあるし、やなこともあるんや! とにかく今の服部はただのやな男やっ。」

・・・平次は完璧ではない。

頭の中で工藤の言葉がリフレインした「和葉ちゃんが服部に悪影響を及ぼす・・・。」

「あ、アタシ・・・アタシ・・・そんなこと考えたことなかった。  
「は?」

「アタシの中で平次は完璧で・・・その平次に受け入れられないア

タシは人間として価値がないて思うてた・・・。」

「・・・和葉・・・。」

「アタシ、平次に嫌われたくのうて・・・一生懸命したんに。でも平次を怒らせてばかりで・・・だからアタシは駄目なやつって思ったら、ますますどうしていいかわからんで・・・。」

「わーっ」和葉は泣き崩れた。泣いて泣いて泣いた。

泣いた後は、憑き物が落ちたようにすっきりした顔で、みなに詫びた。

目はまったくあかない状態だったが。

## (2) 負のスパイラル(後書き)

平次嫌なヤツです・・・。

### (3) きっかけは突然に

翌日、泣きすぎて目が開かず休んだ和葉に平次からメールが入った。

「土曜日、どっか行くか？」

・・・平次から誘ってくれた！？

和葉は心が躍った。昨日友人達と話したことなど、すっかり忘れてしまった。

昨日の事を平次は悪く思ってくれたのかもしれない・・・。やっぱり平次は優しい。平次はやなヤツなんかじゃない。

(アタシもいかな。あんなこと言っけしもうて。ごめんな、平次) 和葉は嬉しくて、すぐ返事をした。

友人達にも昨日のことを詫びるとともに、このことを報告した。

一方学校では

「・・・見た？和葉のメール。」

「見たわ。あれはあかん。」

「せっかく正気になりかけたんに・・・。メール一つで元に戻ってる。」

「服部マジでやな男やな。」

「ええ加減にせんと和葉そのうちセフレにされるんやない？」

「・・・あ、それありうるわ。」

はあああ。みんなため息を一斉についた。

「「「和葉、はよ正気にもどって〜」」」」

土曜日、10月になったばかりなのに、肌寒い日だった。

和葉は待ち合わせ場所で平次を待った。

もうすでに1時間経過している。

「平次遅いな。事件でもあったんやろうか。」

和葉はじっと待った。

携帯を何回見ても連絡はない。

和葉からかければいいのだが、それも今の和葉には憚られた。どれくらい時がたっただろうか、やっと和葉の携帯が鳴った。

平次！？と期待して携帯をとった。「はい。」

「和葉！今どこ？」

美沙からだった。

「え、あ、梅田。平次と待ち合わせで……。」

「梅田のどこ！？ひょっとして、マツクの近くやない？」

「う、うん。」

「やっぱり！今からそこ行くから！一緒に帰んで！」

突然の美沙の怒鳴り声にびっくりした。

「え、だって、平次くるかもしれないし……。」

「まだ言うか！アンタ一体何時間待ったん！」

「え、あ、2時間半……。」

「アホか！アホアホ！何でこな寒い日にそない待つねん！服部はこんな！」

「な、何で……。」

「今、アタシらマツクに入ったんやけど、……服部と塩崎らが一緒に窓の外見て笑うてんねん！アンタもう何やっとな。ええ加減しな。」

「……ほ、本当？」

「嘘ついてどうするん？なあ、和葉もう気付きや。自分を大事にし。とにかくアタシが迎えに行くからっ」

そう叫んで、ぷちっと携帯が切られた。

和葉の中の何かががらがらと崩れていった。

（平次……何で来てくれんの？アタシを見て笑ってるって……どうしてなん？）



あまりのショックに呆然と立ちすくむ和葉の1メートル先に一人の長身の男が立った。

焦点の合わない目で見上げると、射るような視線で見つめ返えされた。

・・・誰？

相変わらず焦点は合わない。段々と視線がフォーカスされて彼の視線と和葉の視線が絡み合ったその瞬間、頭の中でキンツと音がした。

・・・夏・・・射るような瞳・・・絡む視線・・・

パズルのように思い出される光景。

「やっと見つけたんに・・・何ちゅう顔しとんのじゃ。」

男は低い声で言った。

「・・・」

和葉は驚きで声も出なかった。

「ま、ええ。」

男はそういうと自分のかぶっていた野球帽を和葉にかぶせた

「情けないツラすんなや。みっともない」

和葉は俯き「・・・アンタに関係ない。」とやっと小さな声呟いた。

「そりゃそうや。」

男は鼻で笑うと和葉の頭の上に手を乗せた。

「何があったかしらんが、お前のそんな目は見たくない。」

ぐっと帽子のつばを下げると言った。

「あんまりみっともないツラやから、その帽子は貸してやる。そのうち帽子返しにこい。あの時の顔に戻ったらな。」

和葉は思わず顔を上げた。

「―――。」

遠くから男を呼ぶ声がした。

「今、行く！」そちらに返事をしながら男は言った。

「ほなな。」

頭をぽんぽんと叩くと、男は去っていった。

和葉はそれを見送ると、いったん下を見た。

触れられた頭がじんじんする。

冷え切った体に熱が戻ってきた。

アタシはそんな情けない顔をしていたんやろか。ぐっと唇をかみ締める。

情けないからあざ笑られるんや・・・。

しばらくそうしていたが、涙を堪えて、くっと前を見た。向こうから美沙たちが和葉の名を呼びながら走ってきていた。

**(3) きっかけは突然に(後書き)**

和葉ちゃん、もうすぐ復活です

#### (4) やっと目が覚めた

美沙たちに見送られ、家に帰ると、和葉はお守りをはずした。

平次と繋がっていたいと、乙女チックな思いからずっと持っていたお揃いのお守り。

このお守りにいつも、「いつか平次と結ばれますように」と願ってきた。

しばらくじっとみつめていたが、ふっと笑うとハンカチにくるんで、机の上においた。

そして、携帯の電源を落としてベッドに入った。そして眠った。何十時間も。ご飯も食わず。お風呂にも入らず。まるで体に生気を充電するかのように。

そして次の日、昼過ぎに起きると、和葉は元気に出かけて行った。

「美沙！みんな！」

明るい笑顔で現れた和葉は先に來ていた友に声をかけた。

「和葉！」

和葉を見た美沙達に驚きの表情が広がる。

「か、和葉？どうしたん？何か雰囲気が・・・もう大丈夫なん？」  
みな驚いている。

「うん！みんな今まで迷惑かけてごめんな。もうしっかり目え覚めたから！きっぱりはつきり目開けてるから！今までの寝ぼけたアタシはもうおらんねん！またよろしくな。」

「・・・和葉」

「和葉。」

「よかった。和葉が正気に戻った。」  
皆で抱き合い喜んだ。

ひとしきり騒いだところで、はっと周囲の冷たい視線に気づき、みんなこそそと場所を移動した。

とりあえず入った喫茶店で、和葉は質問攻めにあった。

「では、和葉さん、聞いていいですか？」

「あ、はい」

「どういう心境の変化なん？」

「特に何もないで。目が覚めただけや。現実がよう見えたわ。」

「そうかあ」

「うん。」

「もう、服部のことはいいん？ 問い詰めんの？」

「いい。」はつきりというと、和葉はミルクティを飲み干した。

「ほんまに？」

「ほんまに」

「ほんまにいいん？」

「いいって。自分より大好きやった人や。何しても許せるし、もう何や憑き物落ちたんやって。」

和葉はにっこり笑った。

そして、あ。と小さく和葉は言う。と携帯を取り出した。

「アタシ携帯変えたんやった。みんな登録お願い。」

「わかった。」

「でな、他の人には教えないで欲しいんや。知ってて欲しい人には、自分で連絡するから。」

「わかった。」

みな和葉の決意のようなものが見えて、素直に頷いた。

「何か、和葉が前に戻ったというより、元気だった頃よりいきいき

して見える。」

「そう？」和葉は首をかしげた。

「うん。嬉しいわ。」

「・・・そんなにアタシ腐ってた？」

「「「うん」」」

みんなに声を揃えていわれて和葉は苦笑した。

「そうなんや。本当は気分転換に髪でも切ろうかと思ったんやけどな・・・わからんと困るしな。」

「？誰が？」

「いや、こっちの話。とりあえず携帯換えて、お守りを神社の返礼所に奉納してきたん。」

「そう。」

「うん。それにしてもアタシ今思えば鬱陶しい女やったわゝ平次には付き纏って悪いことしたわ。でもアタシも相当やられたし、ま、おあいこや！今から自分を取り戻すんや！」

「そっか。頑張れ！」

「うん！」

和葉は満面の笑みで元気に答えた。

**(4) やつと目が覚めた(後書き)**

和葉ちゃん復活。 案外簡単にスイッチ入りました(笑)

## (5) 賭け

夜、蘭に携帯変更のしらせのついでに、今までの事を洗いざらい告白した。

優しい東の親友は泣きながら怒ってくれた。今までの和葉のことを。

「和葉ちゃん！自分のこともっと大事にしなきゃだめだよ！」

そしてその彼氏に替わって貰って和葉は心から詫びた。

「忠告に気が付くのが遅くなってごめんなさい。」と彼は笑いながら言った。

「困った事があつたら言っただけ。和葉ちゃんに何かあつたら蘭に殺されるからさ。」

和葉は泣き笑いで礼を言って電話を切った。

・・まさか、これがすぐ現実のこととなるなんて。

月曜日。今までさぼっていた合気道の自主練を行い教室に入ると、それまで騒がしかった教室が、しん。となった。

「？」と思って席に向かうと、いきなり大声で叫ばれた。

「あゝ、遠山さんのせいで大損したわ。」

「そうやそうや、遠山お前が弁償せい！」

「は？」きれいな眉を片方上げて、和葉は不審げに聞き返した。

「何が『は？』なん？アンタがちゃんと服部君待ってなかったせいで、アタシら大損したんやで！」

「そうそう、服部君は嘘つきになってまうし、ちゃんと謝ってや。」「畳み掛けるように理不尽な言いがかりを付けられた。」

和葉は黙って聞いていた。何かを考え込むように。それがぼーっと



しているように見えたのだろう

「聞いてんの？」

どん。とどつかれてよろめいた。瞬間和葉の目がぎろつと女達を射抜いた。

「くっ。」最近そんな和葉の態度は見たことがなかったから、女達は一瞬ひるんだが、気を取り直すと口々に文句を言い始めた。

「何？その態度？」

「偉そうなんちゃう？」

「服部君も何か言うてやって。」

我関せずで外を見ていた平次は、面倒くさそうに振り向くと

「お前が悪い。謝れや。」とだけ言った。

和葉はそれに答えず、美沙の方を向くと

「帰るわ。」

一言そう言った。

「・・・和葉、大丈夫なん？」

親友たちは心配そうに見ている。

昨日せっかく元に戻ったのに。またあの和葉に戻るのか？目がそう言っている。

和葉は例の女達や平次から見えないように立ち位置を変えると、にやつと笑った。

こっそり親指も立てている。

「・・・ほっか。わかった。先生には言うておくわ。後でメールしようだい。」

「ごめんな、よろしく。」

しおらしくそういうと、和葉は教室を出て行った。

その翌日。和葉はまた元に戻った。やっぱりあれは気のせいだった

のか。みなはそう思い、和葉はまたいじられる日々が続いた。平次も相変わらず、我関せずの態度を取っていた。

そんなある日、例のグループがまた和葉に絡んできた。

「あんた最近調子乗ってない？」

「おかしいで？」

「服部君迷惑やてよ。」

和葉が無視すると、和葉の肩を「どん」と押した。いつもなら無視する和葉が、その瞬間女の腕をねじりあげた。

「痛い！何すんの！」

「あんたこそおかしいで？アタシに不用意に触って無事で済むと思ったん？」

「痛い痛い痛い！離して。」

女は泣き出したが、和葉は無表情でねじ上げている。

みんなしーんとして成り行きを見ている。

見かねた平次が「おい、お前、やめい！」と声をかけた。

和葉はちらっとそっちをみただけで、手を緩めなかった。

「やられるお前にも原因があるんやろうが！離さんか！」

・・・その時、意外なところから声が聞こえた。

**(5) 賭け(後書き)**

彼が登場します

## (6) 東の名探偵と法曹界のクイーン

「そりゃねえだろうよ。服部。」

ふいにドアの方から声がした。

「く、っ工藤。」

工藤と呼ばれた少年は腕を組みドアに寄りかかって笑っている。

「あめえ、探偵の癖に、殺されるほうにも原因があるとか言うのかよ。」

「工藤君。」

和葉が言うと、工藤は微笑んで近寄ってきた。

腕を捻りあげられた女は「た、助けて。」工藤にすがりついている。それを払いのけながら「大丈夫！」工藤は自信たっぷりに答えた。

「肩の関節外れたら、和葉ちゃんが入れてくれるから。なあ、和葉ちゃん。」

「ほうやね。あたし、肩入れるのうまいで。安心し。」

みんな何事かと茫然としている。

なぜ和葉が豹変したのか、なぜここに東の名探偵がいるのか

実は、あの日、学校を抜け出した和葉は蘭に連絡を取っていた。

「もしもし。蘭ちゃん、お願いがあるんやけど・・・。」

「というわけで、はい。報告書。遅くなってごめん。」

「もうできたん！ありがとう。」

腕をねじったまま、和やかに会話する二人。

「どういふことや！工藤。」

平次が切れたように問い詰めた。

「聞きてえか？服部。和葉ちゃん、言っていない？」和葉が頷くと工藤は続けた。

「このクラスで大金使って行った賭けの実態調査だよ。結構金動いてんねー。学生でこれはやばいだろ。」

「は？」

平次は聞き返した。

「『は？』じゃないんちゃう？どうせアタシが半日くらい待てるかどうか賭けてたんやろ？残念やったな。アンタ損した上に、罪に問われるで。」

「あ、和葉ちゃん、それ無理だった。こいつは賭けてねえんだよ。賭けのネタを持ち出しただけ。うまくやってるよ。」

「え？そうなん？残念やわー。それは罪にならんのか？」

「難しいらしい。」

「ふーん。」

会話を続ける和葉と工藤。目を伏せる平次。

呆然としていた賭けグループの人間は、慌てて口々に叫びだした。

「え。そんなことで罪になるわけじゃないじゃない！」

「そうやそうや。遠山お前適当いなや。」

「アホやろ？お前。実害ないやん！」

それを見て、和葉はニヤリと笑った。

「さあなあ。どうやろ？まあ実刑は無理でも、学校内で大金賭けてやってたんだったら、学校が黙ってないんちゃう？それに、何の考えもなしにアタシがこういうことすると思うん？」

みんなしーんと黙った。

「今頃法曹界のクイーンが校長室でこの報告書の説明してるぜ。」

工藤が面白そうに言った。

「そういうわけやから……。ま、首洗ってまっというて！」  
和葉は楽しそうに言うのと、工藤と教室を後にした。

みんなしばらく呆然としていたが、誰かが「遠山かっこええ。」と言ったのを皮切りに

「和葉最高！」「すっとしたわ！」と口々に騒ぎ出した。

一方のグループは顔面真っ青である。

「服部君！」

「服部何とかしてくれ！」

縫られた平次は力なく首を振った。

「無理や……。工藤と法曹界のクイーンには誰も敵わん。」

みな一斉に項垂れた。

**(6) 東の名探偵と法曹界のクイーン(後書き)**

クイーンまで出しちゃった・・・。

(7) ありがとう。そして、さようなら。

「平次は賭けてなかったんやな。」

廊下を歩きながら、和葉は呟いた。

「ああ。和葉ちゃんがどれだけ服部に忠実かって聞かれて、連絡なしでも4時間は待つ！って言い切ったらしんだ。で、それを証明しろ。と言われて・・・」

「アタシを呼び出した。と。」

「そういうこと。賭けのことは後で知ったらしいんだけどさ。俺にしてみりゃ、服部も同罪だよ。」

「でも、良かった。平次がそこまで腐ってのうて。」

「あいつの真人間としての最後の一滴じゃね？」

「何やドモ○ルンリンクルみたいやな。」

ははははは。二人は声を出して笑った。

でも和葉は気付いていた。こっちを一度もずっと目を伏せていた平次・・・あの表情は・・・。

コンコン。

校長室をノックして入ると真っ青になった校長と相変わらず美しい妃英理の姿があった。

「すみません。遠いところ。」

「いいのよ。和葉ちゃん。ちょうど今日こっちに用があったから。」  
英理は優しく笑って答えた。校長はまだ固まっている。

「と、遠山君。」

「はい？」

「こ、この件ね、君のお父さんには・・・。」

「父にはまだ話していませんけど・・・。」

「そうかね。」



校長は安心したように息をついた。

「あ、あのね。」

後ろに控えていた教頭が頭に汗をかきながら言ってきた。

「学校として厳しく処分するから、お父さんには……。」

英理をちらっとみると、頷いている。

「わかりました。」

英理はそれに続けて言った。

「未成年という事で、罪に問うのは憚られるので、今回は学校にお任せします。しかし、退学というのも少々厳しいような気がしますし、和葉ちゃんの気持ち的にもそれはどうかということなので、その点はよくご配慮下さい。しかし、今回の学校側の措置で更正がなされていないと私が判断した場……。」

一旦言葉をくぎって氷の微笑を浮かべた。

「わ、わかりました！お任せ下さい。遠山君、きちんと先生達が反省させるから！それでいいよね？ね？」

校長教頭平身低頭で謝罪した。

玄関まで英理を見送ると、「和葉。」と声をかけられた。

「……平次。」

「話がある。」

その表情を見て、和葉はふっと笑った。久々名前で呼ばれた気がする。

「ここでええ？工藤君がおるところで。工藤君ええ？」

「ああ。」

平次はちらっと工藤を見、話始めた。

「和葉、今回のことはすまなかった。俺ら悪乗りしてた。あいつらもそこまで悪いやつやないんや。許してやってくれ。クラスメートやないか」いきなり頭を下げた。

和葉は静かに笑うと

「……言いたいのは、それだけなん？」

平次に言った。

「・・・それだけ？ってあと何を言ってほしいんや？」

平次は不機嫌そうに言った後、下を向いた。

「まあ、ええわ。アタシはアンタに言いたい事がある。」

平次が顔を上げた。

和葉はまっすぐ平次を見て言った。

「今まで纏わり付いてごめん。しがみついてごめん。平次をやなヤツにしてもうてごめん。」

「・・・和葉・・・。」

平次は目を見張った。こんなことを言われるとは思っていなかったのだろう。言葉も出ない。

（和葉ちゃん、気付いてたんだな・・・。）

和葉の顔を見て、工藤はそっと目を伏せた。

「平次は優しいから、おかしくなったアタシを突き放せなかったんやな。だからあんな、アタシが愛想尽かすように・・・中々気付けないでごめんな。でももう今日で終わるから。堪忍な。」

頭を下げた。

「今回のことも・・・アタシから離れたようにするため、自分が悪者になって平次が仕組んだんやろ？」

「ちがつ・・・。」

「ええって。何年アンタだけを見てきたと思うねん。ごめんな。ありがとう。」

平次は切なげに和葉を見詰めた。そんな平次に優しく笑うと

「携帯出して」

和葉は言った。

「は？」

「携帯」

平次は意味がわからないというような顔をしたが、携帯をとりあえ

ず差し出した。

「ありがとう。」

携帯を受け取った和葉はぶちっ。ストラップがわりのお守りを引きちぎった。

「お前っ。」慌てた平次に対し、「はい」携帯を返して冷静に和葉は言った。

「もうこんないらんのや。」

「かず・・・。」

「いらんのや。」平次の顔をまっすぐみてきっぱり言った。

「大好きやったで、平次。アタシの17年間は平次でいっぱいやった。最後まで優しくしてくれてありがとう。でも、もうアタシのことは気にせんでええ。アタシとアンタは今日からもう・・・離れるんや。」

しばらく沈黙が流れた。

先に口を開いたのは、平次だった。

「・・・俺はいやや。」

「・・・平次。」

「嫌なんや。お前から離れればいい。と思うてたけど、やっぱり嫌や。恋愛関係なくてもいいやないか！今までどおり一緒におろう。俺らずっと一緒にやったやないか！」

和葉はゆっくり頭を振った。

「だめや。平次。」

「和葉」

「だめなんよ。平次。やって、アタシの中で平次は『all or nothing』なんやもん。」

和葉は笑った。

「・・・かず・・・。」

「それにな、平次から離れな、きつとアタシはまた同じことを繰り返す。だから・・・。」

そう言って満面の笑みを浮かべると、はっきりした口調でゆっくり言った

「さようならや。平次」

和葉の目から一筋の涙がつーっと流れた。

平次が何か言おうとした瞬間、くるっと背を向けると、和葉は工藤に言った。

「工藤君行こう。」

工藤は寄りかかっていた壁から体を起こすと平次に言った。

「じゃあな、また東京来いよ。服部。」

平次は返事をしなかった。

平次はただ唇をかみ締めて和葉の後姿を見送った。

「工藤君、ありがとうな。」

「いや・・・和葉ちゃん、頑張ったな。」

「うん。やっと決別できたわ！」

「そっか」

「うん！蘭ちゃんにもよろしうな。」

「ああ。」

「それからな、工藤君。」

「何？」

「今回の事気付いてたんやろ？」

「・・・まあな。」

「さすが、東の名探偵。」

「・・・和葉ちゃん・・・。服部は恋愛感情は持てなかったけど、本当に和葉ちゃんを大切に思ってたんだ。それはわかってやって。」

「うん。わかつとる。わかつとるよ。」

和葉は泣き顔で笑った。

「工藤君、これから平次の事、頼むな。」

「ああ。わかった。」

じりりりりり。発車のベルがなった。

「ほな、また！」

「和葉ちゃん！」

「何？」

「早く彼氏作れよ！」

「まかしとき！」

和葉は満面の笑みで手を振った。

遠山和葉、17年に及ぶ初恋が実らず終わった瞬間だった。

**(7) ありがとう。そして、さようなら。 (後書き)**

これで第一章終わりです。

平次が嫌なヤツのまま終わろうかとも思いましたが、ファンとしてそれは憚られました(笑)

次は、和葉ちゃんのセカンドラブです。

## 第二章 セカンドラブ (1) 消えていく痛み

目を閉じると脳裏に浮かぶあの光景。

夏……。甲子園……。彼とすれ違った後、ふと振り返った時絡んだ視線。思わず満面の笑みでグッドポーズした自分。目を見張る彼。

「また会えるとは思わなかったわ……。」

「あの時の顔になったら、返しにこい。」

彼はそう言った

あの日の帽子はまだ返しにいく自信がない。  
机の上でじっと自分を見つめている。

「いつ返しにいただけるかな。」

和葉は小さく呟いた。

……。アタシはあの時のように笑える日がくるんやろうか……

(1) 消えていく痛み

平次と決別した日、和葉は次の日の朝がくるのが怖かった。

自分の意志とはいえ、全身全霊で恋した相手と離れたのである。

「アタシ、廃人になるかもしれん……。」

和葉は本気で心配した。

が、予想に反して、毎日は穏やかに過ぎていき、和葉は拍子抜けした。

人間の心は案外丈夫に出来ているらしい。

もちろん、平次漬けの毎日を送っていた和葉にとって、平次が抜けた穴は大きかった。

心の穴があまりにも大きすぎて、ゆらゆらゆら不安定になる事もある。

しかしその穴は、平次ではない何かで確実に埋められていく。

それを意識するたびに、ちりつとした心の小さな痛みを感じていたけれども、気が付いたら、平次がいない違和感を感じなくなっていた。

それはとても寂しいことだったけれども、その事実が気付いたとき、もう本当に終わったのだ。と和葉は安堵した。

ほっとしたはずなのに、和葉の白い頬に、つーつと一筋涙がつつた．．．。

和葉が平次のことで流した、最後の涙だった。



## 第二章 セカンドラブ (1) 消えていく痛み (後書き)

ぼちぼち次の恋が始まります

## (2) あなたをお探しです

年明けの新学期、みんなで他愛もない会話をしていたら、美沙が「もうすぐ先輩方とは会えなくなるから、寂しいわ」と突然言い出した。

和葉はきょんととして

「何でなん？まだ卒業式まで、だいぶあるやんか？」

「何言うとんの？受験に入るから、学校は自由登校になるやんか！」その言葉に和葉は口にしていたクツキーをぽろりと机に落とした。

(・・・そうやった！忘れとった・・・。うわー迂闊やったわ。っちゅうことは、あの人も3年やから、もう会えんとか・・・そんな嫌やゝ！)

和葉は机に突っ伏して悶絶した。

「か、和葉？」

「大丈夫？」

反応なし。

「そんな先輩達に会えなくなるのだ辛いん？でも、受験終わった先輩は、部活の指導とかで学校にきてくれるんちゃう？」

「・・・部活？」うつ伏せたまま和葉は呟いた。

がぼっ 次の瞬間、和葉は勢いよく顔を上げた。

「美沙っ。」

「はいっ！」

「アタシ笑えてる？」

「はっ？」

「アタシ、今、ちゃんと笑えてる？」

「笑えとるよ？」

その返事を聞くやいなや、和葉はがたと立ち上がった。

「アタシ行つて来る。」

「ど、どこに？」

・・・放課後、和葉は、ある野球グラウンドにいた。

（広っ。遠すぎて選手の顔が見えん！）

フェンスにつかまり目を細めるが、誰が誰だかわからない。

隣でキャーキャー言う声が聞こえたが、それには反応せず、一人の選手を一生懸命見つけていたその時、

ガシャッ

和葉の斜め前で音がした。

思わずそちらに顔をむけると、グラウンド側のフェンスに、野球部のジャンバーをきた男が腕を組んで寄りかかって立っている。

「ドナタカ オサガシデスカ？」

男は棒読みで言いながら、ちろっと和葉のほうを見た。

その綺麗な横顔に、和葉は「あっ。」と小さく叫んだ。

「・・・アナタヲ オサガシデス・・・。」

どくんどくん 動悸がする。

「ふんっ」

男は鼻で笑うと、前を向いた。

「待ちくたびれたわ。」

ぶっきら棒な物言いに和葉は苦笑した。

「・・・あははは。やっぱり？ちよっと時間がかかってしまいました・・・。すんません。」

頭をぽりぽりかきながら弁明すると、男はかかかかっとな声を出して笑った。

男は笑い終わると、グラウンドを横に移動し始めた。

訳がわからず和葉もついていくと、低くなったフェンスのところからヒラリと飛び越して和葉の前に立った。

すらりとした長身に目深にかぶった帽子から見える、端正な顔。

思わず和葉は見惚れて、立ち止まってしまった。

そんな和葉に男は黙って手を差し出す。

「？」

戸惑う和葉の手をぐいっとつかむと、急に走り始めた。

「な、な、な、どこ行くん？」

結構なスピードで引っ張られながら、和葉は叫んだ。

「ロードワークや。待たせた罰にお前もついてこい！」

「え、アタシ、帽子を返しに・・・ちよっ、は、早いって。スピード落として〜」

和葉の絶叫と男の楽しそうな笑い声がグラウンドに響き渡った。



(2) あなたをお探しです(後書き)

43巻の彼です

### (3) おおきに

はあはあはあ。和葉はまだ肩で息を整えている。

そんな和葉をよそに、男は涼しい顔して「お前体力あるな。普通の女やったらついてこれんぞ。」

なんぞのたまっている。

和葉は、あのままのスピードで、この河川敷の土手まで引っ張ってこられた。

(くくくあんたがひっぱたんやろうが！アタシのこの状態が目に入らんのか！)

苦しくて声は出せないから、和葉は涙目で訴える。

男は笑いながら

「そうむくれるなや。ほら、間に合ったで。見てみい。」  
そうやって川の向こうを指差した。

・・・綺麗な夕陽が川をオレンジ色に染めている・・・。

「うわー綺麗・・・。」

和葉は思わず呟いた。

「綺麗やろ？」

「うんっ。」

わーっわーっと嬉しそうに声をあげながら、和葉ははしゃいでいる。

「・・・」

男はそんな和葉を優しい目で見つめていた。

「ありがとうなっ！」

突然くるっと振り向いて満面の笑みでお礼を言った和葉に、男はびつくりして目を見張った。

「何が？」

「え？ここに連れてきてくれたことと、・・・帽子でぶっさいくなアタシの顔を隠してくれたこと。」

和葉は笑いながら言った。

「ああ、あれな・・・。」

思わず言葉が詰まった男に対し、和葉は何が楽しいのか、三日月のように目を細めて笑っている。

「・・・ええ顔できるようになったやないか・・・。」

「ん？」

「また見れてよかったわ。」

帽子のつばをくいとさげ、男はそう呟くと、自分もにかっと笑って手を差し出した。

「俺は稲尾一久。改めてよろしうな、遠山和葉。」

稲尾の笑顔に和葉も目を見張った。

そして自分も太陽のような笑顔を浮かべると、その手をきゅっと握り返した。

帰り道。

今度はゆっくり歩きながら、稲尾は和葉に尋ねた。

「なあ、和葉。」

「何？」



「お前、なんであの時、あんなことしたんや？」

「あの時って？まさか、甲子園のグッドポーズ？」

「ああ。」

「ああ、あん時なく、どんなピンチでも真っ向勝負挑む稲尾さんにえらい感動してなく。そしたら、偶然稲尾さんに会えたやん？それで、その感動を瞬時に伝えようとしたら・・・。」

「・・・あのポーズになったと。」

「そう。」

ふっと笑うと自嘲気味に稲尾は言った。

「負け投手やけどな。」

和葉はむかつとして、両手のコブシを握って抗議した。

「そんなやなくて！アタシ本当に感動したんやで！」

「・・・ほーか。」

気の無い返事をする稲尾。

「ほうやで！アタシ夏はあの試合思い出すだけで、ご飯ガツガツいけたもん！」

今度は満面の笑みで話す和葉に、稲尾は噴出した。

「ほーか、ほーか。和葉は俺をおかずにしたんやな。」

「・・・そうなるんかな？」

意味がわからず首をかしげた和葉に、ぎやはははは。稲尾はたまらず笑い出した。

「もう！何なんよ。人がまじめに話してるんに！」

和葉がむくれると、ひーひー笑いながら稲尾は謝った。

「すまんすまん。」

もうつと和葉はぷんとして歩き始めた。

「・・・自分でも悔いはなかったんやけどな、でも、まあ、アンタにそう言われたら、頑張つてよかったって改めて思うわ」

後ろから聞こえてきた真剣な声に和葉は思わず振り向いた。

「おおきに。」

稲尾はこどものような顔で笑っていた。

**(3) おおきに(後書き)**

彼は稲尾一久でした。

#### (4) 惹かれあう二人

その日から和葉は稲尾と頻繁に会うようになった。

部活がないとき、学校を出る時するメール。数秒後にかえってくる「わかった」だけの短い返事。

待ち合わせは、あの土手だったり、駅だったり、ファーストフード店だったり。

でもどこで待ち合わせしても、必ず先に稲尾が来ている。

そして、和葉を見つけると、ポケットに手をつ突っ込んだまま

「かゝずは」

と呼ぶ。

嬉しくて小走りで近づくと思わずあたまを小突かれる。もうつと膨れると、いたずらっ子のような顔で笑いながら、顔を覗き込んで「どうやった今日は？」と聞いてくれる。

・・・和葉が待たされたことは一度もない。

二人の距離はどんどん縮まっていった。

がやがやがや

某所のファーストフード店。

体を斜めにして頬杖をつき、長い足を偉そうに組む端正な顔の男と、きちんと背を伸ばして座る色白の美少女。

絵になる二人は周りの視線にも気付かずに楽しそうに話し込んでいく。

一通り笑いあった後、和葉は喉が乾いてジュースを飲みながら、思い出したように稲尾に尋ねた。

「なあ？」

「なんや？」

「何でアタシの名前知ってたん？」

「・・・お前今頃か？」

「今さらやけど・・・ずっと気になってな。」

「ふん。」

稲尾は和葉から視線をはずすと、興味なさそうに窓の外を眺めた。

「・・・ずっと探しとったからな。」

あまりの小さな呟きだったので、聞き逃しそうになったが、思わず和葉は身を乗り出した。

「探し・・・え？ずっとって、いつから!？」

「・・・甲子園以外でどこかで会ったか？俺ら。」

ジト目で睨む稲尾。

「・・・梅田」

和葉はつまらなそうに呟いた。

「あほ。あん時にはもうお前のこと知ってた言うたろうが。」

「・・・そやったっけ？」

「・・・そんなことより・・・」

稲尾は手を伸ばして、ぐいっと和葉のポニーテールを引っ張った。

「お前、違う髪形せんのか？」

「痛いって!んゝ慣れてるからな・・・これ、似合わん？」

「いや、似合うんやけどな。この綺麗なうなじがなあ・・・後ろの男がな・・・。」

和葉の向こうを睨みながら言った。

最後のほうは眩きに近くてほとんど聞きとれなかったが、どうやら違う髪形にしてほしいらしい。

「ふくん。ほな、今度おろしてこようか？」

「おっええな。ほな、今度の日曜な。」

さらっと初めて休日に予定を入れられた。

稲尾は気付かないのか平然としている。

しかし、「うん・・・。」和葉は少し赤くなって頷いた。

**(4) 惹かれあう二人(後書き)**

ナチュラルにいちやつく二人って難しい・・・

## (5) トラウマ

「んんん。」

和葉は悩んでいた。

かれこれ30分は鏡の前で唸っている。

今日は日曜日。稲尾と会う約束をしているだが……。

稲尾と休日に会うのは初めてである。

いつも制服で会ってるから、当然私服になるわけで……。

「どうしょ……時間ない……。」

着ていく服は決まっている。

冬休み、東京で蘭とショッピングしたときに買ったワンピース。蘭と店員にもものすごく似合うと勧められて買ったものだ。

靴もコートもバックもその時服に合わせて選んだ。

そして、稲尾のご要望どおり、髪もおろして、毛先だけくりんと巻いている。

自分的には似合ってると思う。思うのだが……。

でも、まだ悩んでいた。

「変やなかろうか。」

また鏡の前でくると回ったとき

「和葉。」

母親がドアの外から呼んで、部屋に入ってきた。

「アンタ、まだおんの？ 待ち合わせは大丈夫なん？」



「おかあちゃん。」

和葉は情けない声で泣きついた。

「ねえ、この格好どう思う？変やない？かわいい？」

母親はびっくりして目を見張った。そしてにっこり笑うと

「かわいいでー和葉。さすがおかあちゃんの子や。」

「そう？」

そう言ったものの、和葉はまだ鏡の前でぶつぶつ言いながらくるくる回っている。

その姿を微笑みながら見ていた母親は、

「今日は平ちゃんとの約束じゃないんやね。」

ぽつりとそう言った。

「へ？」

不思議そうに和葉が振り向くと、

「だって、そんな和葉の姿初めて見るから……。」

「あー」

（そりゃ平次との約束は、待たされる事前提やから、冬はデザインより機能重視やったしな。）

苦笑いした和葉に母親は明るく言った。

「ほらほら！さっさと行かんと遅れるで？」

「あ、もうこんな時間や！おかあちゃん、行ってきます！」

「はい、行ってらっしゃい。晩御飯いらん時は早めに連絡してな。」

「うん。」そう言って、ブーツを履いて玄関を出た。が、また玄関から顔を覗かせた。

「おかあちゃん。」

「何？アンタまだ行ってなかったの？」

「お願い、もう一回かわいい言うて。」

子どものようなお願いに母親はぷつと噴き出した

「かわいいで、和葉。自信持って行ってき？」

和葉は満面の笑みを浮かべると

「はいっ、行ってきます!」

今度こそ元気に駆け出して行った。

待ち合わせ場所が近づいてきた。

コツコツコツ。足を速める。時間は充分あるが、時間をつぶす余裕は和葉にはない。

胸がどきどきしてた。

やっと待ち合わせ場所が見えたとき、「きゃはははは」という女の甲高い笑い声が聞こえてきた。

その瞬間ふいにあの日のことがフラッシュバックのように蘇った。

・・・待つアタシ・・・来ない平次・・・嘲笑・・・

ぎゅっ、その光景を振り払うように目をつぶった和葉の耳に

「和葉っ」

稲尾の力強い声が聞こえてきた。

「・・・い、稲尾さん?」

ぐいっと腕を引かれる。

「行くぞ。」

怒ったように言うと、和葉の手をとり歩き始めた。

「・・・ど、」

どうしたんと言おうとしたら、稲尾が口を開いた。

「・・・俺は待たせたことないやろ?」

「えっ?」

稲尾は前を見たまま言葉を続けた。

「俺はお前を待たせことないやろ?俺は絶対理由無くお前を待たせ

ん・・・信用せい。やから・・・」  
一旦区切ってキツパリ言った。

「あない顔せんでええ。」

「・・・」

真剣な声に、和葉は声が出なかった。鼻の奥がつんとして、彼の後姿が歪んで見える。

・・・自分のためにいつでも先に来てくれていたのだ。この人は。思わず繋いだ手をきゅっと握る。

それを優しく握り返しながら、まだ前を向いたまま稲尾は言った。

「・・・似合うとるな。」

「へっ？」

「髪・・・と服も。でも、他のヤローの目がうるさいから、走るで。」

振り返ってにかつと笑うと、雑踏の中に二人は紛れ込んでいった。

(5) トラウマ (後書き)

かわいい和葉を目指してみました。  
原作ではいつもかわいいんだけど、しよっちゅう待たされるんだっ  
たら、かわいい靴はまず無理かな。  
と。

## (6) 好きになる資格

稲尾のことを考えるとときどきする。  
稲尾に触れられるとそこが熱くなる。  
稲尾に会えないと胸が苦しい。

「・・・これが恋やろか？」

「そうだよ！和葉ちゃん！」

東京からやってきた親友、蘭に相談するとにやにやした笑顔で返された。

二人は、今、大阪で起こった事件の捜査に協力している工藤を待ち、お茶をしている。

当然盛り上がるのは恋バナで。

蘭のノロケが終わった頃を見計らって、相談を持ちかけたら、冒頭のように断言された。

「・・・そう思う？」

「思う思う！ねえ、稲尾さんって、あの甲子園のピッチャーだよ。会ってみたいなあ。」

「だっだめ！蘭ちゃん美人さんやもん。稲尾さんの目がハートになったら、アタシ正気でおられんわ・・・それにアタシ別に彼女じゃないし」

服のすそを掴んでもじもじしながら和葉は言った。

「・・・和葉ちゃん・・・和葉ちゃんたら、もうっ。かわいい！」

「・・・蘭ちゃん、勘弁して・・・」

和葉は照れてまた俯いた。

服部との話を聞いたとき、蘭はあまりに頭にきて、服部を叩きのめそうと大阪に乗り込もうとしたが、新一に止められた。

「人の気持ちを外野がどうこういうことではない。」と。

そして「和葉ちゃんもそれには気付いていたんだ。」と。

和葉の一途な気持ちを知っているだけに、怒り心頭だったが、その後の新一と和葉とのやりとりを聞いて、蘭は複雑な気持ちになった。初恋を終わらせるために、和葉はここまで心が引き裂かれるような思いをしなくてはいけなかったのか……。命をかけた初恋だったからこそ、それが必要だったのか……。

蘭にはわからない。ただ「和葉ちゃんを心から大事にしてくる人が現れますように。」そう願わずにいられなかった。

それから一つの季節が過ぎた今、大切な親友は、幸せそうに頬を染めて新しい恋をはじめている。

「……本当に良かったね。和葉ちゃん。」

「……うん。でもな……。」

「どうしたの？」

「ん、いやな……何か自分が信じらんねん。あんなに好きだった平次と離れたばかりなのに、他に好きな人って……。こんな簡単に心変わりするアタシは、人を好きになる資格ないんやなだろうか？」

複雑な表情で和葉は言った。

蘭は思わず眉を顰めた。

（服部く〜ん（怒）あなたのせいで、人間（自分）不信になってんじゃない！どうしてくれんのよ！東京来たときは夜道に気をつけなさいよ！）



## **(6) 好きになる資格(後書き)**

平次への失恋はいろんなところで障害になっています



## (7) バレンタイン

和葉は悩んでいた。

もうすぐバレンタイン。いわずとした告白の一大イベントである。蘭にけしかけられたからだけではないが、最近稲尾の事が好きすぎて自分でもどうしようもない。

(・・・アタシの性格からして、そのうち好きが爆発して暴走してしまいそうな気がする。)

とりあえず暴走した自分を想像してみた。

・・・まずい。非常にまずい。

自分が怖くなって、想像するのをやめた。

気を紛らわせるために、チョコレート特集の雑誌をばらめくる。

その時、「和葉」と友達が話しかけてきた。

「うん？」

「チョコ作るん？」

「うん。」

「甲子園投手に？」

「うん・・・って、何で知ってんの!？」

驚いて見上げると美沙達がにんまりした顔で和葉を取り囲んでいる。

「この間。」

「街を歩いていたら。」

「手を繋いでいちゃいちゃ歩く超目立つ二人。」

「誰かと思ったら」

「あたしらの友達」。

「しかも、すれ違ったのに」

「こっちに気付きもせず」

「……すみません、ごめんなさい、謝るから、もうそれやめてください。」

和葉は速攻謝った。

「付き合ってたの？」

「ううん……」

「好きなん？」

「……うん……」

和葉は真っ赤になって下を向いた。

さっきまでからかっていたのに急に静かになったので、目を上げたら、みんな目をウルウルして和葉を見詰めている。

「ちよっみんなっ。」

「よかった、好きな人ができて、よかったなあ、和葉。」

「もう、大丈夫やんな。よかったなあ。」

口々に言われて抱きしめられる。

「……うん。」

和葉も瞼がじんわり熱くなった。

「頑張れ！頑張りたいよ。」

「……うん。ありがとう。」

その日、教室の一角は異様な雰囲気にも包まれた……。

みなとも相談したが、結局和葉は、オペラケーキを作ることにした。チョコの甘みとコーヒーのほろ苦さが混ざり合う大人のチョコレートケーキ。

まるで稲尾のようなケーキだと和葉は思う。

稲尾は甘党ではないから、手のひらに載るくらいの小さな箱を用意した。友人達には大きな箱。

和葉は色んな思いを込めて一生懸命作った。

想いが伝わりますように。と。想いが通じなくても、『好きという気持ち』をくれた感謝の気持ちが伝わりますように。と。

そして、今まで黙って見守ってくれた友人達には感謝の気持ちを。

当日和葉は落ち着かなかった。もう授業どころではない。

なんと言って告白すればいいのか？

なんせ産まれてこの方、まともな告白なんぞしたことがない。（ちなみに平次への告白は過去形）

考えてもいい言葉は浮かばない。

（なんやかんや言うより、一言の方が気持ちが伝わるかもな・・・。）

6時間目にして、やっと結論を出した和葉は、震える手で稲尾にメールを打った。

いつものように、返事はすぐ帰ってきた・・・。

(7) バレンタイン(後書き)

告白までいかなかった・・・すみません

## (8) ずっと好きだった

今日は稲尾は学校に行ってなくて、和葉の家の近くの駅まで来てくれるらしい。

(稲尾さんやったら、もてるから学校に行ったらチョコいっぱい貰えるやろうに・・・チョコ、面倒くさいんかな？アタシのは貰ってもらえるんやろか？)

ぐるぐる考えているうちに駅についた。

しかし、珍しく稲尾がいない。

おかしいと思って、きよろきよろ見回すと、「かゝずは」いつもの声で名を呼ばれた。

「？」

声が出た方を見ると、帽子を目深にかぶり、サングラスをかけた稲尾が、改札近くの柱に寄りかかっている。

・・・はつきり言って、ガラが悪い。

「・・・それ何？」

「今日は変装の気分なんや。」

「へえ。」

(・・・絶対女の子対策やな)

和葉はちよつと不機嫌になった。

和葉は二人で話せるところに行きたかったのだが、この格好のままお茶するのも何なので、近所の公園に行く事にした。

そこでやつと稲尾はサングラスをはずして、シャツにさした。

そのさりげない一連の動作に和葉はぼーっとした。

（かつこええ……。うわー……。もういきなり好きて言ってしまうわ）

暴走しそうな心を抑え、公園のベンチに座っていつものように他愛のないおしゃべりをする。

会話が途切れたとき、今がチャンスと思い、和葉はバックをこそごそあさってチョコレートの箱を出した。

「あの、これ……」

と差し出そうとしたとき、それを手で制された。

「えっ？」

受け取っても貰えないのかとショックで目がぼやけたとき、

「聞いてええか？」

稲尾が真剣な声で言った。

コクン。和葉は頷いた。

「お前、他の男にこんなやつたか？」

ふるふるふる。和葉は頭を振った。

「……俺だけか？」

コクン。

「ほんまにか？」

「うん、稲尾さんだけや。女の子の友達にはやったけどな。あのな、アタシ、稲尾さんのことが……」

（好き）という前に、稲尾に抱きしめられた。

突然のことに、胸がどきどきする。

心臓が壊れそうだ。

「本当なんやな……。お前の幼馴染にも、やらんやつたんのやな？」

「はっ？へーじ？」

すっとなきような声が出た。

・・・今の今までその名前忘れてたわ・・・

「やっとらんよ？」

「そうか。」

稲尾がほうつと息を吐くと、和葉の髪を一房手ですくった。

その手がかすかに震えていることに和葉は気付いた。

「稲尾さん・・・寒いん？」

「・・・こないな時にボケかますな。」

稲尾は和葉の体をゆっくり自分から離すと、まっすぐな視線を和葉に向けた。

射抜くような熱い視線に和葉は動けない。

「好きや・・・和葉。」

「・・・」

「あの日からずっとお前が好きやった。」

「・・・ほんまに？」

「ああ、好きや。」

もうたまらずに和葉はぎゅっと稲尾に抱きついた。

「・・・アタシも好き。大好き。」

「・・・みたいやな。」

稲尾は嬉しそうに笑うと、和葉の顔を覗きこんだ。  
その目はとても優しく、和葉は胸が熱くなった。

真っ赤になった和葉に稲尾は愛おしそうに目を細め、頬を撫でた。  
そして、

「目えつぶれ。」

耳元で囁くと、稲尾は顔を傾けた。

二人は唇をそっと合わせた。



**(8) ずっと好きだった(後書き)**

やっとくっつきました。次で終わりです。  
久しぶりにあの方が出ます。

## (9) アタシは恋をする

「和葉」と愛おしく呼ばれるアタシの名前。

頬に手を寄せられ、目を閉じると、落ちてくる優しいキス。

好きで好きで胸が苦しくなって思わず背中に抱きつく、優しく添えられる彼の大きな手。

毎日毎日好きが溢れて、アタシの心は甘酸っぱい幸せで満たされていく。

あの辛かった失恋の傷みは、今はもうどこにもない。

・・・アタシは確かに今、彼に恋している。

あれから、平次が和葉のことを彼女にしたい（決して告白ではない）と言いつ出し、周りを巻き込んだの一騒動あったが、稲尾と和葉の交際は順調に続いた。

そんな夏のある日。

夏期講習から帰ってきた和葉は、家のポストに分厚い封筒を見つけた。

「遠山和葉様・・・アタシ宛やん。何やろ？これ。」裏を見ても差出人は書いていない。

部屋に入り中身を出した。

「なんやこれ・・・。」

分厚いレポート用紙に載っているのは、ひたすら女・女・女。

表紙には「稲尾一久調査報告書」。言わずと知れた、稲尾の過去の彼女達である。

ご丁寧の写真の下には、女の名前、学校名、交際期間、関係の度合

い、おまけに評価まで載せられている。

「・・・平次やな。」

和葉は呟いた。

幼馴染の意図を十分理解していたが、とりあえず怖いもの見たさで、ばらばらとめくった。

見たくないのに、食い入るように見てしまう。

こうなってしまったら、やめれない、止まらない。

「・・・やっぱもてんな。一久。しかもきれいな人ばかり。才色兼備が好みですか。あゝそうですか。ほいで全部短期間。」ぶつぶつ解説する。

「・・・あゝ、やば・・・。本当凹んできた」

稲尾を信じている。信じてはいるが、凹むものは凹む。

ようやくやっと最後のページに辿り着いた。

それを見たとき、和葉は目を見張った。

もう一度よく見た後、顎にひとさし指をあてて、考え込んだ。

そして花のようにふわっと笑うと、携帯を取り出してどこかにメールを打ちはじめた。

「首洗ってまっというて。」

送って数秒後、そのメールの受け取り人から慌てて電話がかかって来た。

「な、何や？和葉？どうしたんや？」

「ん？会ってから話す。」

「え、何？俺？何した？」

困惑する相手に何も答えず、「家におるん？ほな、今から行くから。待っててな」

と笑って電話を切った。

・・・一時間後

「・・・何やコレ？」

稲尾は項垂れて座っている。  
横に座って和葉は平然と答えた。

「多分平次の仕業と思う。」

「何考えとんや。アイツ・・・。」

ここは稲尾の部屋。稲尾はひたすら項垂れている。

「おモテになりますな。一久はん。」

「・・・和葉。いじめんといてくれ。」

「ふゝん。アタシは一久が初めての彼氏なんにな。」

少し悲しげな声でいうと、がばっと顔を上げて稲尾が言った。

「過去はどうしようもないやんか！あの頃お前にあっとしたら、絶対お前と付き合おうとるわっ。」

「・・・ふゝん。」

「和葉、勘弁してくれ・・・。」

「アタシ別に怒ってないで？」

「・・・それはそれで悲しい。妬いてくれ。」

「アタシはどうすればいいん？」

そう言うとき稲尾が後ろから和葉を抱きしめた。

「俺もわからん。」

ふふふと笑うとき和葉はいたずらっ子のような顔をして、後ろの稲尾を見上げた。

「実はなアタシ少し嬉しかったんよ。」

「・・・はっ？」

「最後の彼女と別れた日。あれ甲子園の決勝戦の翌日やんな。それから彼女おらんやんか？あれってアタシのこと気にしてくれてたんちゃう？」

くすくす笑って瞳を覗き込まれて、稲尾は赤くなった。

ぎゅっと和葉を抱きこむと首筋に顔をうずめて拗ねたようにいった。

「・・・そうや。お前といつ再会してもいいように、女きったんや。・・・いや。違うな。もうお前以外目に入らなかったんや。」

ふふふふ。本当に嬉しそうに和葉は笑った。

「でも、一久の初めては、アタシには何もないんやね。」

そういうとちよつと悲しそうに稲尾の頬に手をあてた。その手を握りながら

「・・・それは違う。」

稲尾は言った。

「ん？」

「一目ぼれしたんも、好きな女とキスするんも、この部屋にいったんも全部お前が初めてや。お前は俺の初めて全部や」

「・・・そ、そうなん。」

ついでに、と呟いて

「いつかお前の初めて全部くれん？俺、待ってるから。」

和葉は真っ赤になって俯いたが、小さく頷いた。

・・・人の気持ちに絶対なんてものではない。あんなに好きだった平次が思い出になって、アタシは今、一久に恋している。先のことはアタシにもわからない。けど、今のアタシのこの好きという気持ちを大切にしたい。

・  
・  
・  
アタシはまた恋をする。

(9) アタシは恋をする (後書き)

やっと終わりました。思いのほか長くなってしまいました。読んでいただいております。

「平次が和葉のことを彼女にしたい。」と言い出した事件は、また今度投稿します。よかったらそちらも読んでみてください。平ちゃん、ちょっとかわいいです。

本当にありがとうございます。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8876u/>

---

それでもアタシは恋をする

2011年10月9日11時47分発行